

聖霊のはたらき

ヨハネによる福音 14:15-16、23b-26

（そのとき、イエスは弟子たちに言われた。）「あなたがたは、わたしを愛しているならば、わたしの掟を守る。わたしは父にお願いしよう。父は別の弁護者を遣わして、永遠にあなたがたと一緒にいるようにしてくださる。わたしを愛する人は、わたしの言葉を守る。わたしの父はその人を愛され、父とわたしとはその人のところに行き、一緒に住む。わたしを愛さない者は、わたしの言葉を守らない。あなたがたが聞いている言葉はわたしのものではなく、わたしをお遣わしになった父のものである。わたしは、あなたがたといたときに、これらのことを話した。しかし、弁護者、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊が、あなたがたにすべてのことを教え、わたしが話したことをことごとく思い起こさせてくださる。」

説教

きょうは聖霊降臨の主日、ペンテコステです。これはギリシア語で50番目の日という意味です。主の復活から50日後におきた出来事、きょうの第一朗読に書いてある出来事を記念してお祝いします。使徒言行録の1章の後半に12使徒の補充選出のこと（ユダの補充）が書いてあり、そのときの人数が120人だったと書いてあり、ペンテコステの日（ユダヤ教の祝日でいえば五旬祭）に集まった一同とはこの120人のことを指しているようです。彼ら彼女たちが聖霊に満たされて霊が異国の言葉で120人に語らせた出来事がペンテコステにおきました。それを目撃した多くのユダヤ人はこの奇跡に驚き3000人が仲間に加わったと記録されています。この事例をふまえてペンテコステは教会の誕生日ともいわれています。

さて、つい二週間前にもこの聖書箇所を読みました。そのときには「タフで

なければ生きていけない、聖霊がいてくださらなければ生きていく気にもなれない。」とか聖霊の別名はヘルパーさん?などといいましたが、きょうは別の視点から、新約聖書の使徒言行録から聖霊について考えてみようとおもいます。

さて、サウロ*注1はなおも主の弟子たちを脅迫し、殺そうと意気込んで、大祭司のところへ行き、ダマスコの諸会堂あての手紙を求めた。それは、この道*注2に従う者を見つけ出したら、男女を問わず縛り上げ、エルサレムに連行するためであった。ところが、サウロが旅をしてダマスコに近づいたとき、突然、天からの光が彼の周りを照らした。サウロは地に倒れ、「サウル、サウル、なぜ、わたしを迫害するのか」と呼びかける声を聞いた。「主よ、あなたはどなたですか」と言うと、答えがあった。「わたしは、あなたが迫害しているイエスである。起きて町に入れ。そうすれば、あなたのなすべきことが知らされる。」同行していた人たちは、声は聞こえても、だれの姿も見えないので、ものも言えず立っていた。サウロは地面から起き上がって、目を開けたが、何も見えなかった。人々は彼の手を引いてダマスコに連れて行った。使徒言行録 9:1-8 (注1:パウロのユダヤ名、注2:キリスト教のこと)

サウロことパウロはキリスト教徒の迫害者でした。あるとき迫害者パウロに復活のキリストが現れパウロは一時的に失明します。その出来事をきっかけにパウロは回心して熱心な宣教者になりました。パウロはキリストがわたしの内にいるという表現でその回心の内容を語っています。回心からしばらくしてパウロは、ペトロとヤコブに会うためにエルサレムに行きます。その会談の内容には使徒言行録ではふれていません。聖霊理解の視点からこの会談内容を想像してみると、そこではパウロが回心するきっかけとなった復活のキリストの現れと、ペトロ・ヤコブに現れたキリストが同じキリストなのかどうかをパウロは直接逢って確かめたのではないかとわたしは推測しています。きょうの第一朗読の「一同は聖霊に満たされ、“霊”が語らせるままに、ほかの国々の言葉で話しだした。」がパウロの身に起きた出来事と同じかどうかを確かめに出かけたのではないかとということです。

会談の結果、同じキリストだと確認ができたので、パウロはキリスト宣教を続けたことをわたしたちは知っていますが、もし、これが違うキリストだったとした？両者は仲たがいしてパウロ派、ヤコブ派というキリスト教内部抗争が始まったかもしれません。実際、使徒言行録はパウロの言動についてユダヤ教だけでなくキリスト教会からも迫害をした様子が記録されているので、すんなりと収まっただけではなかったことがわかります。逆にいえば、その様子から信仰についてまた、聖霊についての理解も深まるように思えます。一致をもとめて、愛をもって乗り越えていく様子こそがキリスト教そのものなのだ、という聖霊理解ができます。

ところで、なんで新約聖書はギリシア語で書かれているのだろう、という疑問がわたしの中にはくすぶっています。聖霊に関して言えば、ヘブル語ではルーアフア＝風とか息吹という意味、ギリシア語ではプネウマとなります。アラム語ではなんていうのか・・・気にしだすと止まらなくなります。そこでふと「ことばの表記」についての限界を感じ始めました。いいかえれば、聖霊はことばではうまく表現できないのだということに気づきました。それは表記上の問題だけではなく、話し言葉でもなかなかうまく表せないかもしれません。

人に聖霊体験を聞くと、それはさまざまです。ちょっとこれって違うんじゃないのっていうのもありますが、わたしの間人理解が浅いせいでそう感じてしまうのかもしれませんが。逆にあまりに深すぎるといふか、とっぴょうしもないことなので理解に苦しむということもあります。イエスのことば、掟と書いてあることばでいえば「わたしがあなた方を愛したように、互いに愛し合いなさい」が根底にあることがとても大切です。互いに愛し合うこと、これが聖霊のはたらきの要素ではないかとおもいます。
